



## 松川 恵一

株式会社レクト代表取締役。36歳。  
IMP・ACT、Prinzをはじめ、数多くのショップ、  
ブランドを手掛けるマーケット・プランナー。  
その業績は全国的にも定評がある。

# THAT'S BUSINESS ENTERTAINER.

## 漬しの美学。

あらゆる空間に潜在するマーケット・ゾーン。そこは、歩き方に特徴がある彼以外、誰も踏み込めない聖域である。



「フランクにいきいたい。」

それが彼の哲学である。波が寄せたら岸に近づき、波が引いたら岸から遠ざかる。そんなトレンドリーな「フランク」を彼は好む。でも、その彼の間々に一歩一歩、確実に足跡を残していく彼のウォーキングは、結果的には緻密な計算の上にあると思えてならない。彼が気ままにリズムをとるメトロノームとするならば、時代という音楽は不思議なまでに彼のリズムに同調してゆく。そんな魔術師的な魅力が彼にはある。

彼が「Prinz」を手掛けたときのエピソードを紹介しよう。「子供みたいなところがあるんですよ。玩具もすごく好きだしね」と自ら口にする彼は、このときも目の前の粘土を捏ねくり回していた。そして、遊んで出来たその作品を持って、「こんな建物建つんやろかと初めて建築の人間に話をしたという」「何とか建ったけど」と彼は笑って話し、こう続けた。

「レイジ・カラーニは自然のラインを出すために、鳥の背中をデッサンするんですよ。そして、グリッップをデザインするときは粘土を自分でグチュツと握って、それをそのまま使うんですね。彼のやり方は人間工学的に見ても、非常に素晴らしい。自分はそこにもっと欲求を追求したい。何がしたいのか。それがあれば、そのポルテージを上げていく、自分の中で高めてやって、現実のものとする。それって、何か自然でしょ」

彼は本当に自然なスタンスで歩いているのだということがこの言葉からもよく解る。

彼にとって、マーケット・プランナーという肩書きは大きな可能性へのパスポートである。実際、彼は自らの仕

事を「既存のマーケットのリニューアル」と位置付け、店舗・下着・家具・食品・家電製品など幅広いプランニングを手掛けてきた。

「会員システムを考えてくれ、ということもありました。僕にとっては全ての空間が素材であり、仕事のフィールド。幅は広いですね。その上、僕の仕事はいわゆるブレン活動ですから、本当に広く、そして深いですよ」

「ブレンの立場で人を操作するのって楽しいですよ。自分の創造力の枠を超えて、事が進んでいくんだから。そこで生じる相手の不確実性も、逆に考えると大きな可能性ですからね」

明確なヴィジョンは彼には恐らく無用であろう。何故なら、彼のスタンスは一緒に歩く人によって自然に変わるものであるし、また、変わらなければ「ブラン」は生まれてこないのだから。「自分のスタイルもあるけれど、面白いなっと思うものに一回一回飛び付く自分はすごくトレンドリーな人間だと思っんです。すなわち、誰もがいろんな欲求をその時々を持つ訳でしょ。それに対応できなければ、僕の仕事は成り立たない。揺れながら、動きながら、自分なりの答を出して、その答をフィードバックすることで自分のヴィジョンが見えてくる。そりゃあ、ひとつひとつの仕事については、いろんな思惑がありますよ。でも、長期的なヴィジョンはあえて持たないようにしてるんです。どんな物でも、時間が経つと腐ってしまいますからね」

ヴィジョンを持たないのはすごく不安な事だ。でも、それを敢えてする。その姿勢が、彼の存在理由なのかもしれない。

「フランクに生きたい」

結局、それが彼なのである。